OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	田中裕教授を送るにあたって
Author(s)	信多, 純一
Citation	語文. 1981, 38, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

田中裕教授を送るにあたって

田中裕先生は、昭和二十五年五月、大阪大学文学部創設と共に発足したばかりの国文学科助教授として、甲南高校より赴任され、以来三十年有余、かつて校庭に植えられた樹木の今や亭亭たるごとく、国文学科を大きくお育てになり御退官の期を迎えられるに至った。その永き歳月の間、教育に研究に精励され、大学紛争に入るや学部長に推され、また人間科学部分離後の文学部緊急整備の重責をにない、再度の学部長に乞われて御就任、美学科の増設、大学院日本学専攻設立に尽瘁され、その御退休の日を目前にされている。

先生の御退官をもって、わが国文学科はその草創期を力を合せて乗りこえてこられた先生方すべてをお送りし、新たな世代に入ろうとする。その後を継ぐ者の一人として、感慨また一入のものがあり、その任の重きを痛感している。

さて、今ここに先生を送るの辞を草するにあたって、はたと筆が止り困惑しきっている。それは、先生の下に十三年間、助教授をつとめてきた私であるが、先生のことについてはどれほども知らなかったことに、今あらためて気付いたからである。先生の学問について、またその人となりについて、実は何一つ存じ上げていないことに愕然としている。転任直後、たちまち紛争に巻き込まれ、定期券をこれほど有効に使用したことのないほどに連日出勤し、深夜まで杯を手にお互いに語り合ったことである。しかし、今に振り返ってみれば、二人の間で学問の話を交したことは皆無に等しいことを知る。さらに先生の人となりにしても、その奥深いところを何一つ把握していなかったことに気付くのである。

とは申せ、永いおつきあいの間に、その人となりの相の幾つかには触れ得たことは言うまでもない。先ず一番に先生は日常よく物忘れをなさる。今日の時間をお忘れになっているのではないかと、研究室一同でよくやきもきしたことである。思索に耽り、遠くを見つめられて日常鎖事などに意を用いられない顕われであろう。それでは現実的でないのかと思うと、学部長として示されたその手腕の程はきわ立ったものがあり、総長候補にも再度推された記憶は今も事新しい。もっともこれは、先生の人柄のままに、人との出会いがあり、人に助けられ、時の機を得られての、徳分のなせるわざも大きかったと思われる。

先生はまた、人前で話をしなければならないといったことを極端にいやがられる。また同じように人のそれを聞かされるのもおいやのようである。国文の旅行などで土地の案内が始まると、ふいとその場を離れて辺を逍遥される。福井県平泉寺で、一老人が庫裡から現われ、求められずして説明を始めた時もそうであった。一人離れてかたわらを見る先生に老人の一喝がとんだ。これが先生御自身も今も話題にされる平泉澄氏とのなつかしい出会いであった。そうした先生の姿のかげに、私など先生のはじらい、人にすぐれた感覚の鋭さを感得する。人との関係、自他のことばに対する感覚が、先生をして居たたまれぬ思いにするのではなかろうか。

名著『中世文学論研究』の冒頭部に次のような箇所がある。「本稿の方法、手続についてあらかじめ言ふべきことはほとんどない。それらは以下の具体的な考察と叙述とを通じて明らかにする、といふよりもむしろその過程で当面の対象の性質に準じて導き出し、かつ馴致してゆきたいと思ってゐる…」とあるこの「馴致」ということばに、まさに先生独得の世界を垣間見る思いがする。中世の思想的高峰に位置する人々の芸術論、美的世界を終始正攻法で追い続けられ、その論に沈潜し、その表現の微妙のひだに分け入ってゆかれる先生独自の学問に、まさに相応しいことばと感じる。この書中用いられている外来語はほんの数例に過ぎないが、それが「らじかるな方向」「学説のぶらいおりてい」と圏点付きの平仮名表記されているのを見る時、先生のきびしさと繊細な感覚、さらにはその使用に際してのはじらいの念さえ感じ取られ、粛然と襟を正す思いがする。

先生のきびしさ、勁さはつとに全学的に鳴り響いている。紛争時、深夜の団交の壇上に只一人崩れを見せぬ先生の姿に、古武士の面影を重ね見た。しかし、同時に人なつっこい、全く邪気のないその笑い顔に、先生のやさしさを端的に見るであろう。

思えば、先生を知るためには、先生の深さに至らねばならぬ隘路のあることを知る。自由に逍遥される幽邃の林は、容易に踏み込み得ぬ世界であり、所詮私などの到底及ぶことの出来ない幽幽深遠の境であった。受講生もその学問を継承することはきわめて難しく、その衣鉢を継ぐ者いまだ皆無に等しい。ただ、それぞれが先生の無言のお姿から学問の姿勢を体得するのみである。

先生が澄んだ目で見つめられるその永遠の世界にも似て、いつまでもみずみずしい先生に、先生が私と同じ立場で過去数回御退官の先生方に捧げられた「南山之寿」の頌詞を、「南山」において、南山の如き寿を時とわに保たれんことをお祈りするの意に重ね用いて、ここに捧げさせていただく。

昭和五十六年一月十六日

信多純一